

悪に関わるのか、あるいは ネガティヴなものに関わるのか

Dr. mal / du regard

フランソワ・ジュリアン 一 訳 大橋完太郎

François Jullien / trans. Kamuro Otshiki

同時代の言説、いや、より正確に名づけるならば、グローバル化された公式の言説は、あたかも自らの究極の理由を示すかのように、まったくもってポジティブなものへの合法的な切望を、私たちの耳に向かつてはきりと発している。まったくもってポジティブなものとは、すなわち、「平和」この言葉は、あらゆる言語において唯ひとつの意味をもっているかのように、飽きるほどなく繰り返されるだろう）、共働、コミュニケーション、といったようなものだ。あたかもネガティブなもの排除がついに手のうちに収まったかのように、また、ネガ

ティヴなものを歴史から永遠に排除するためにはそれこそが吹き飛ばすべき最後の錠前であったかのように、あるいは少なくとも、それを可能にするためにはそれを望むしかなかった、とでもいうかのように、まわりをとりまく言説は、一連の解決に従いながら、大胆にも希求法を用いている。もつと戦争を、もつと分割を、もつと境界線を……：これらがその解決なのだが。あるいはひよよとして、道のりはさらに長いものだろう、と思案にくれた現実主義者はため息まじりに言う。とにかく、議論の余地のないことだが、政治的言説と宗教的言説、教皇とタライラマ、偉大な教会、致だ）とが、いまや合意しているのだから、と。ところで、少なくとも言説のレヴェルでこの安逸な一致が勝利を収めるのと

同時に、驚くべきほど幼稚な仕方で、悪魔的なものが新しく上演され、再び現われてくるのが見られた。歴史を輝かせるには、悪魔的なものを排除し終えることで十分なのかもしれない。「私のように、それを、悪の枢軸と呼んでください。好きなようにお呼びになればよい。だが、真実を言うおうではないか！」（ジョージ・ナッシュ、二〇〇一年五月三日、ブシネススタックの前で発表された言説。というのも、こうした局面においては、究極の「結託」こそが、思いもかけず私たちをぐずぐずさせるものになるからだ）まさに、共産主義体制が少し前に、「輝く未来への到達を悪魔のように妨げる究極の共謀について語っていたように。繰り返すが、「悪」、あるいはほかの名前であろうとそれは同じものだが、悪という名において、常に、抵抗する点、あるいは躰きの点が、いかなる一貫性にも参与しえないようなものとして指し示されているのが見られるだろう。それ故、悪とは、それを根絶したいという意志と帰着することになる。悪を根絶したいという意志にとつては、今なお、対抗し交戦すべき新たな（最後の？）来襲が、問題となる。その結果、悪を根絶する意志

には、最終的にそれに値する価値があると認められる。実際、今まで「グローバルゼーション」と通例呼ばれていたものが、ネガティヴなものの可能性の条件を急激に変化させたように私には思える。というのも、現在まで、ネガティヴなものは容易に他者として名指されてきたままであったし、世界も分裂したままであった。自らに対立するような外部が、常に存在し続けてきた。ネガティヴなものとはもう一方のブロックであったつ連にとつてのアメリカ合衆国、あるいはその逆。あるいは、ネガティヴなものとは、異なるもうひとつの階級のことであった（プロレタリアートに対するブルジョアなど）。冷戦の時代、同じく階級闘争の時代には、そのようなネガティヴなものは、きつちりと照準として定められていた存在であった。さて、グローバルゼーションがこうした外部性を抹消したのだが、この外部性によつて、ネガティヴなものの中のあるものは排除されることになっていた歴史もまた、そのネガティヴなものと同働していた。ネガティヴなものを位置づける外部に野営地がなくなるやいなや、ネガティヴなものは外部から論理的に導き出され、内在化する。